

門二ス8
番 996
1-3

金地道人編輯

安政風聞集

此君亭藏

明治二十一年四月二十四日
藤野 清 氏寄贈



安政風聞集序

一災後れば二災起るべし。宣るる我去年は冬の大震あり。今此の

秋も大風あり。家屋我傾布。樹木を僵り。大不同く。雨乃
 壁を我浸。土倉を潰せる。暑く。是不用多。洪水溢れ。資財を
 流。衆人を溺ら。時候の不順ある。故小此。事及及び
 かも。按小政情。徳隠。時。厥風屋我。折る。死
 古き。諸も今。不。天災。自然。春。代。風。鳴
 雨塊を。九。水。湯。年。災。自。然
 水旱の災害あり。是は。時。春。天。自。然
 聖代。道。新。當。避。逃



遠くを遊ばして遠くありのゆるる。但諺ふりて今に浮世を倒へたる故は自他
薛の猶違へく天の地は薛の道なきもやいふべし。はまば陸の
船帆より水より人深し。丘より壊れを凹とあり。溝の埋れを凸となる。人
家人より家作より家も破れをノとあり。王荆公が見まうる。
何れかそむくはあはじ。然る今般の颯風の管根うらあちときけと。
よりほどあけく吹めく。場小所謂の都へ都へ西北小顔ありて
身を傷りたる人寡く。東南大破あり命が害あり人衆し。甚形勢小
目を的る小守に神社は荒涼で。修覆の時より氏を拜み。善ふ佛寺の
再建小縁の衆生を憑むる。斯る時節小あひおひの。わら
千歳も幹より折れを。百年目のわ五十年末筆で風颯く金風より

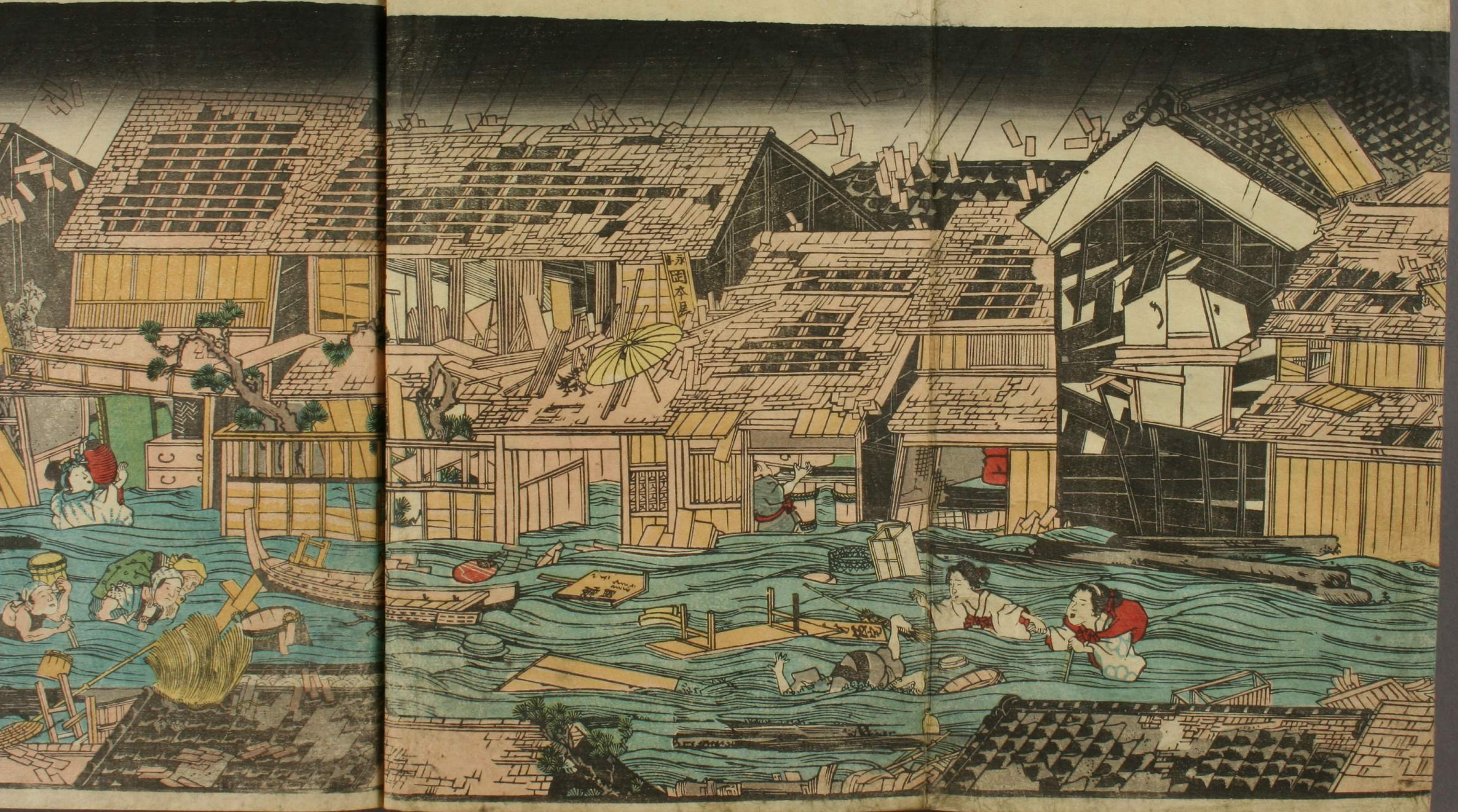
嵐のな柳。花のふる。枝は情あり。果の真世とあひけらる。或は
或は大魚押さるる小水小く。螺蟻流れ入るる春舟の真に制せん。
竟に非情の物とあり。又望川の水横に漲り。未田菜畦の粒を辛苦成
水より水より主謀る。羅漢寺ありて農氏より偏祖右肩より西肌小
真の果より構を再歩る玉の汗流るの必て名詮を溢る水の
深川の假宅小感情を賣る遊女の却て首たあをゆるぬ。はまば陸の
まのなを。陶器の西行より人づかぬ。行方とまれぬ。かありり。
あまの鳥飛を冥とつる。張九齡が。わら知る詩人あり。わら
わの必をよせま。とほふや。為頼の中納言あり。歌人あり。又戦
競々といふ。毛詩後より。雅人あり。垣と吹拂ひを隣とむるふあり

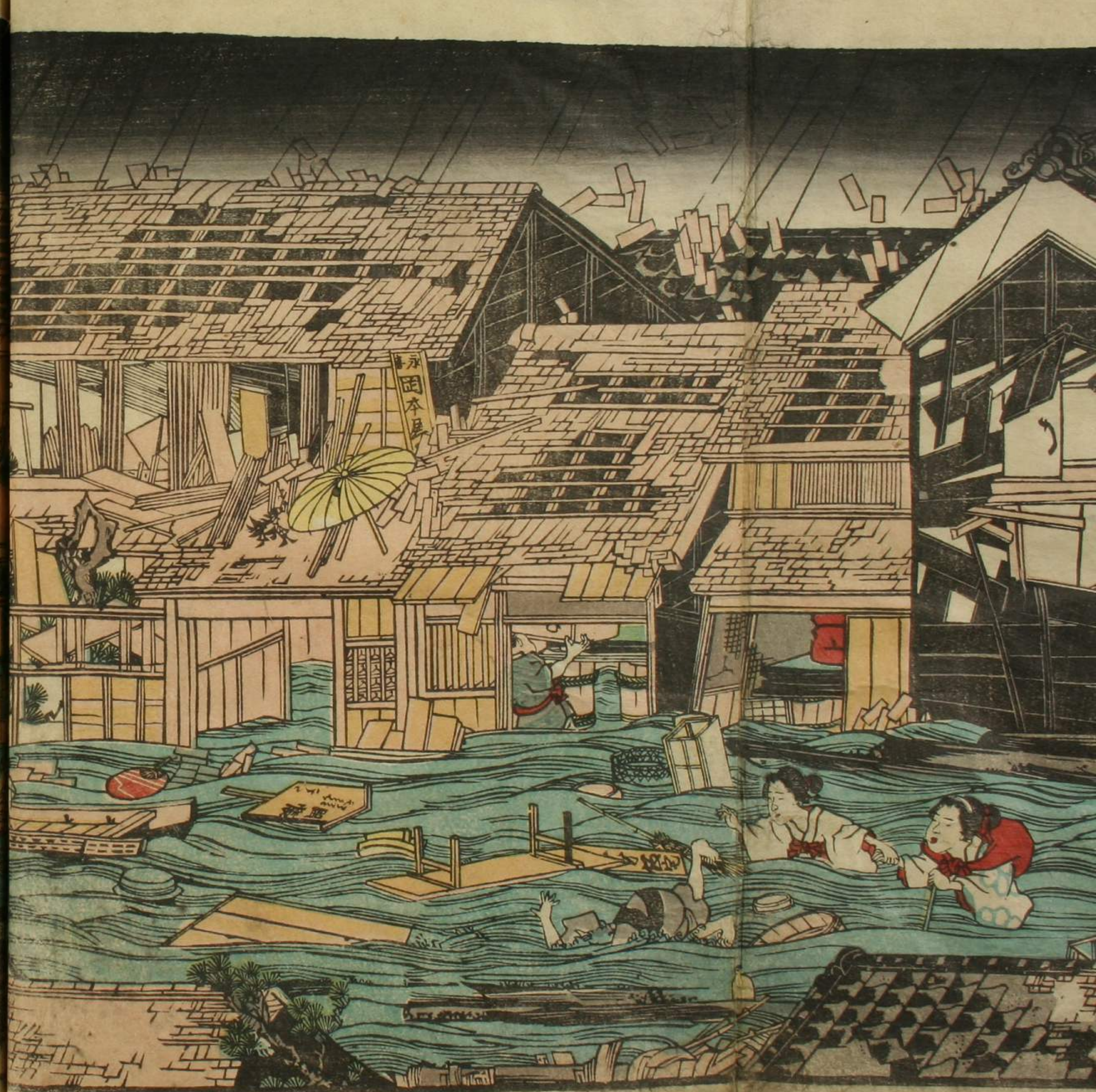
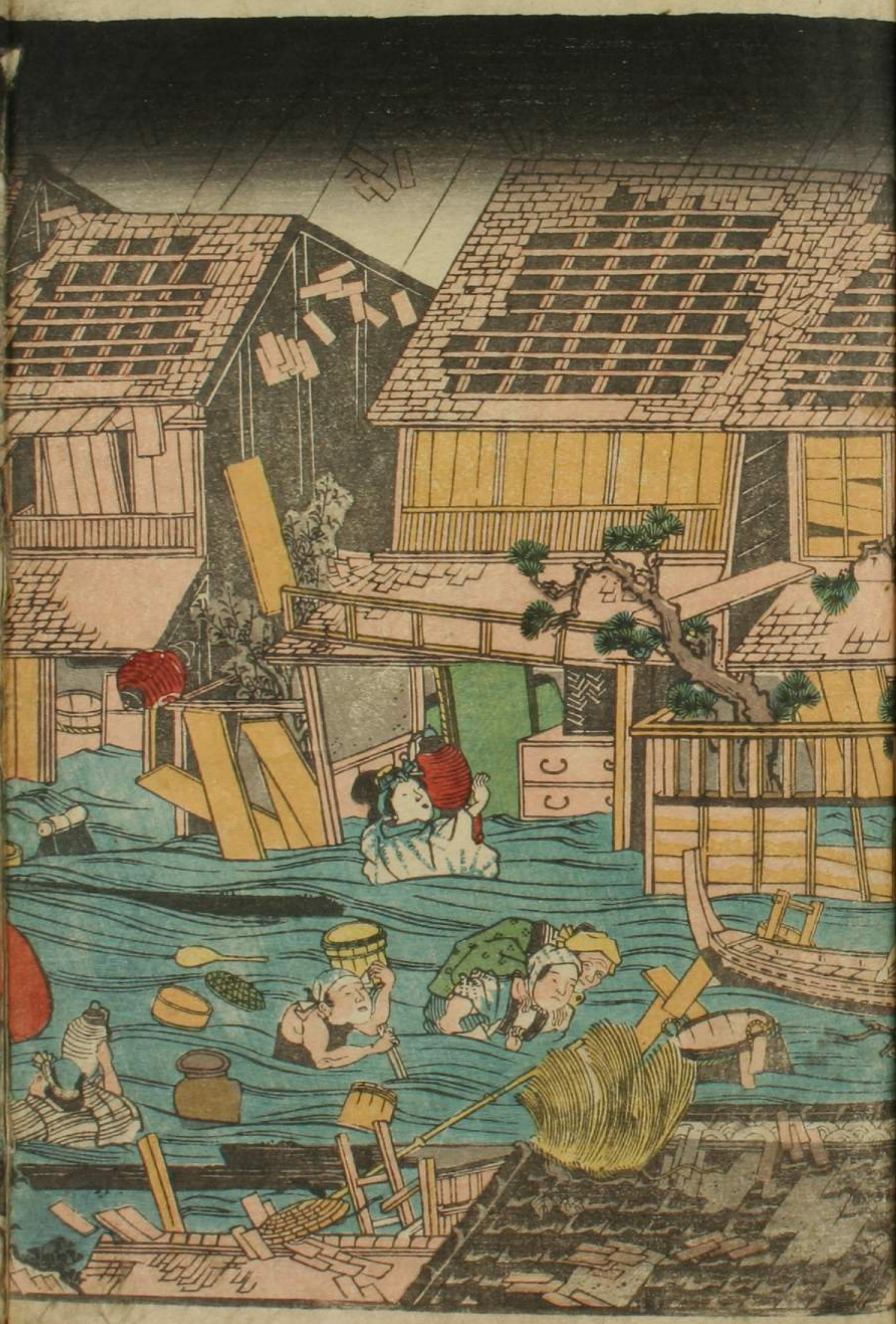
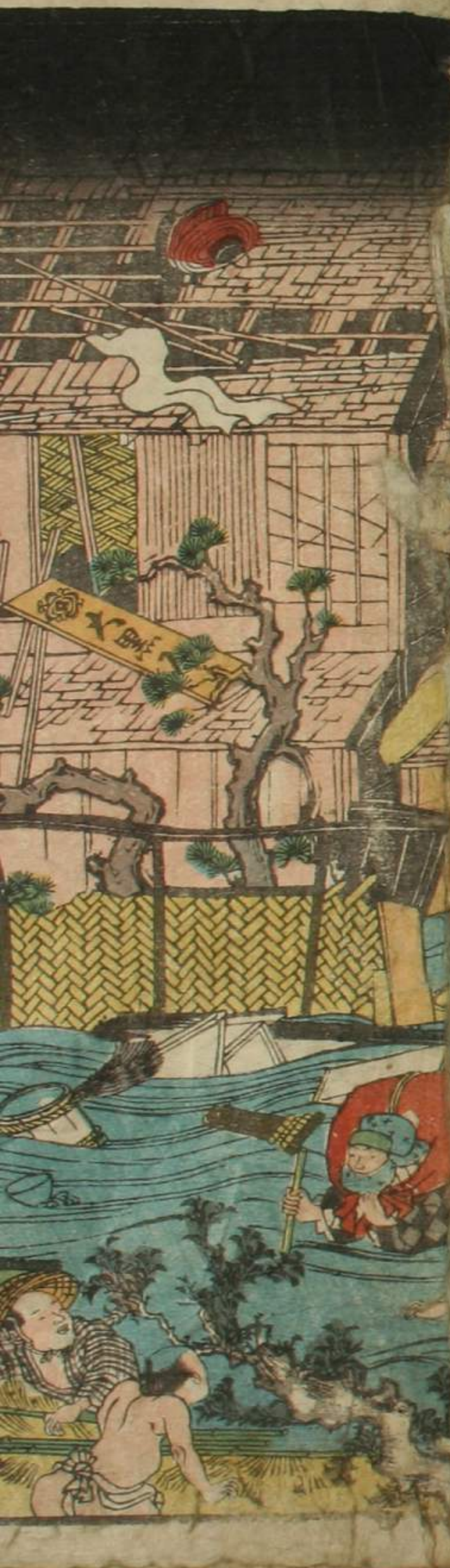
とく人^{とくじん}の^{とく}方丈^{ほうじやう}の^{とく}記^きの^{とく}あり^{とく}を^{とく}信^{しん}人^{じん}ある^{とく}ん。ある^{とく}命^{いのち}を^{とく}危^{あや}れ^{とく}晴^は間^まを
 ま^{とく}ち^{とく}を^{とく}い^{とく}ん^{とく}と^{とく}の^{とく}登^{のぼ}蓮^{れん}を^{とく}ぬ^{とく}法^{ほふ}師^しも^{とく}あ^{とく}る^{とく}。又^{また}ひ^たの^{とく}あ^{とく}を^{とく}い^{とく}の^{とく}あ^{とく}
 顔^{かほ}連^{れん}ゆ^{とく}ん^{とく}と^{とく}ま^{とく}る。秋^{あき}湖^こよ^{とく}異^いなる^{とく}そ^{とく}う^{とく}い^{とく}男^{おとこ}も^{とく}あ^{とく}る^{とく}。育^やが^{とく}見^みつ^{とく}け
 秘^ひ身^みづ^{とく}間^まつ^{とく}者^{もの}を^{とく}上^{かみ}下^{しも}と^{とく}ま^{とく}る^{とく}海^{うみ}に^{とく}ま^{とく}ど^{とく}か^{とく}く^{とく}い^{とく}る^{とく}水^{みづ}は^{とく}凍^こる^{とく}難^{がた}木^ぎ
 陸^{りく}よ^{とく}あ^{とく}る^{とく}海^{うみ}の^{とく}屋^や上^{かみ}板^いの^{とく}か^{とく}を^{とく}も^{とく}つ^{とく}た^{とく}を。佛^{ぶつ}信^{しん}男^{おとこ}女^めの^{とく}哀^{あは}別^{べつ}離^り苦^く大^{おほ}抵^{たい}
 如^{ごと}斯^{ごと}と^{とく}あ^{とく}る^{とく}海^{うみ}に^{とく}銭^{ぜに}。客^{きやく}の^{とく}首^{くび}よ^{とく}あ^{とく}る^{とく}を^{とく}小^こ木^ぎの^{とく}う^{とく}に^{とく}お^{とく}
 安^{やす}政^{せい}の^{とく}年^{とし}丙^ひ辰^{ちん}十^{じゅう}月^{げつ}廿^{にじゅう}二^に日^{にち}雨^{あめ}太^{おほ}く^{とく}降^ふる^{とく}夕^{ゆふ}より^{とく}車^{くるま}を^{とく}濡^ぬる^{とく}
 地^ち震^{ゆづり}強^{つよ}く^{とく}揺^ゆれ^{とく}且^{かつ}も^{とく}も^{とく}り^{とく}稿^{こう}を^{とく}脱^{だつ}す

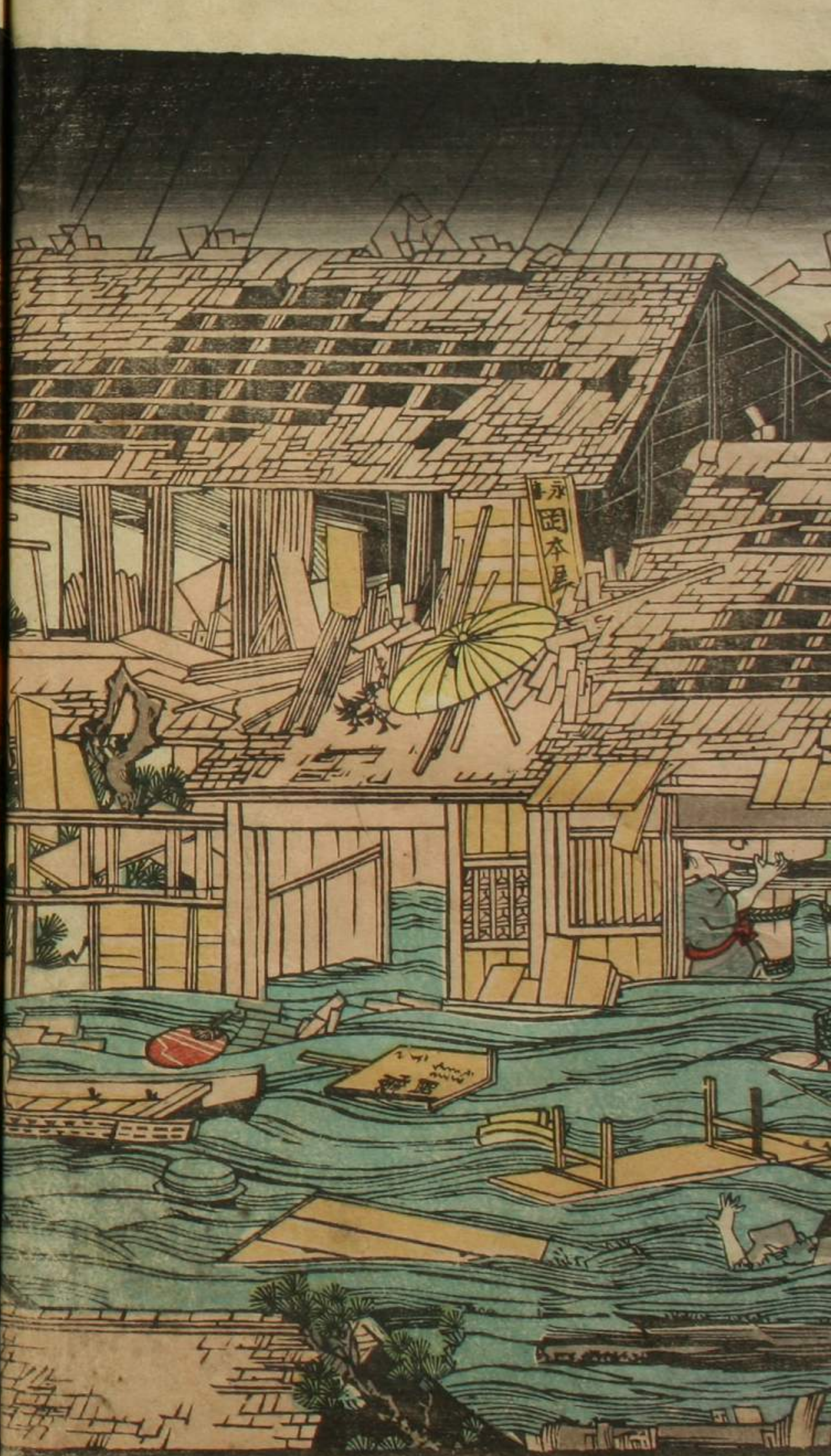
物本一は公海戲述











○後河内へ入り島田後校是終まりこ何事も御遠大本倒れ
中難及及が如是又西みありしや海中の終まるの事無して
い麗よりみのぶ乃子原万沢南於人亦も古き友なる事多
換し家よりし又奥津由井蒲原是又和泉多けきか倒れ亦
多く海乃の往來難深せしや入りしや川もあつて是まきと
あししや更より衣原原津海乃のさまでみあねと換入して
大分の渡家倒れ亦あつてあ腐の田地も出来しやあり
○伊豆の島の下着より深きへきてみつ戸田大田子のりさ
何事も大凡大なるよふ像ふ沙のり上まりを難長いふ事あり
休下田の出海もさか風もさけく家と倒れ且の上げはさ
がたふつるさき屋方大小のふ流もあつて難長より難長と
いふ事あり

○あつてより津浪の先懐きしや海死の老いなりしや仁田
通山小糸田の如の難ありしやとも大木倒れ家と流し
家せし人のあまうさむ更より外浦うらぐ赤沢川名網代ハ風破
の家ありしや風船と遊しありしや
○あつては終まるの事無しと難長の海浪場もさか終まるの事
さかみする事無しと難長の海浪場もさか終まるの事
○お換へ移る事肥まぐる梅沢江の島はさか下田小糸田大
更より本井の如場も大船小船亦壊れ又の丘もく吹しありし
りの敷地も細代よりと浪浦ハ津浪もさか終まるの事
死せる人の事ありしや又浦原もさか終まるの事ありしや
終まるの事ありしやとも實の事無しとありしや

中井良津の

船を以て候の

大凡雨の

勢を以て

海客の

さまと見えしはが

天小の舟破損

ト云

字をせ候に

候に八月と

候に

候に八月と

候に八月と

候に八月と

候に八月と

候に八月と

候に八月と

候に八月と

候に八月と

候に八月と

候に八月と

候に八月と

下田



西浦雲彩地町和泉屋何来の岬一不守先年の津
浪の波ハ頭ハ不海鳴り月の色さ人只ありねバ海端何れも
出て云居さ道とも然せるもそ成不又さ成り怪面を記し居
るがひひくと彼不の付まふ不あり冷々と事と持ちま
てバ家内へもと来り只忙れとさるものゝるもそ成の引果
て又且びなえ不居る者皆引性して一身中りけりけるを
弟不後さ然めて彼家の候海へ動瀾あるもあり又或人の
交津浪とさより主人の具是捲と脊負く少人迹するが不是元へ
汐の来り衣紗て令助とじと捲の蓋叩け利金のこゝねて身
體不走走里亭き命と拾ひ裸せ然めて又且び最なるきねの枝不
主人の甲をとりてけりしむとばも身の毛汗まじりありけり

交猛烈一うねど我中のと一儀心痛ぬ一人々の脚記
せしもの無とあり是ハ津浪不ありて只南風不吹と吹と
ままするあるべし

○又今浪本牧のこいも毎年の吹来ありそ船をて候あきとさけるな
彼不不及ぶるうり是吹来せしる身と由のたまあるあるべし
○傍及の波根小田原大坂平塚はどの海へ逆さぬるもは是まに成
換の舟楫が居候心不えけるあり候はた候候と居り多分の荒れ見
へねとも凡ふも又そ寄居てとひをなき大敵と損トおべく是へ大
本とと倒しけるもいん及べ一板あゆみのづし
○小田原より凡来入る田より湯入るも是連不塔の波入り途不なき
ある揚き一が山不押流さるは川も流さるなり



本契より海に人の心 彼地の遠征といふ陽春の巻ふ一つの
小川とみせし系をの挿振とありしうい川をの流河をて流る少
一の流とあるがは教係ふの押おるふ着あると初め上の少
遊迹さふ凡而烈く飛大洞するを不流く嫌喝の保火と懐ち
漸く之迹し流不彼陽春の別夜下株ある流ましう

○余が友宮傍一旅ぬーお天と浦那又と死といふ此不旅蘇せ

為八月廿二日の以ふみんそが相教ふ入人静まると後河不とも
る海上のいらく凄まじく動いといと懐くを睡眠もつを教と
しり旅舎の主人不はると聞て主人養へてい少旅の是古老の意
傳つるあつての關ひるうぐーと後ふあふふの厥凡流波の氣ざりて
海底のあ深文して關ひるあるるぐー主人のあ關とて流波の

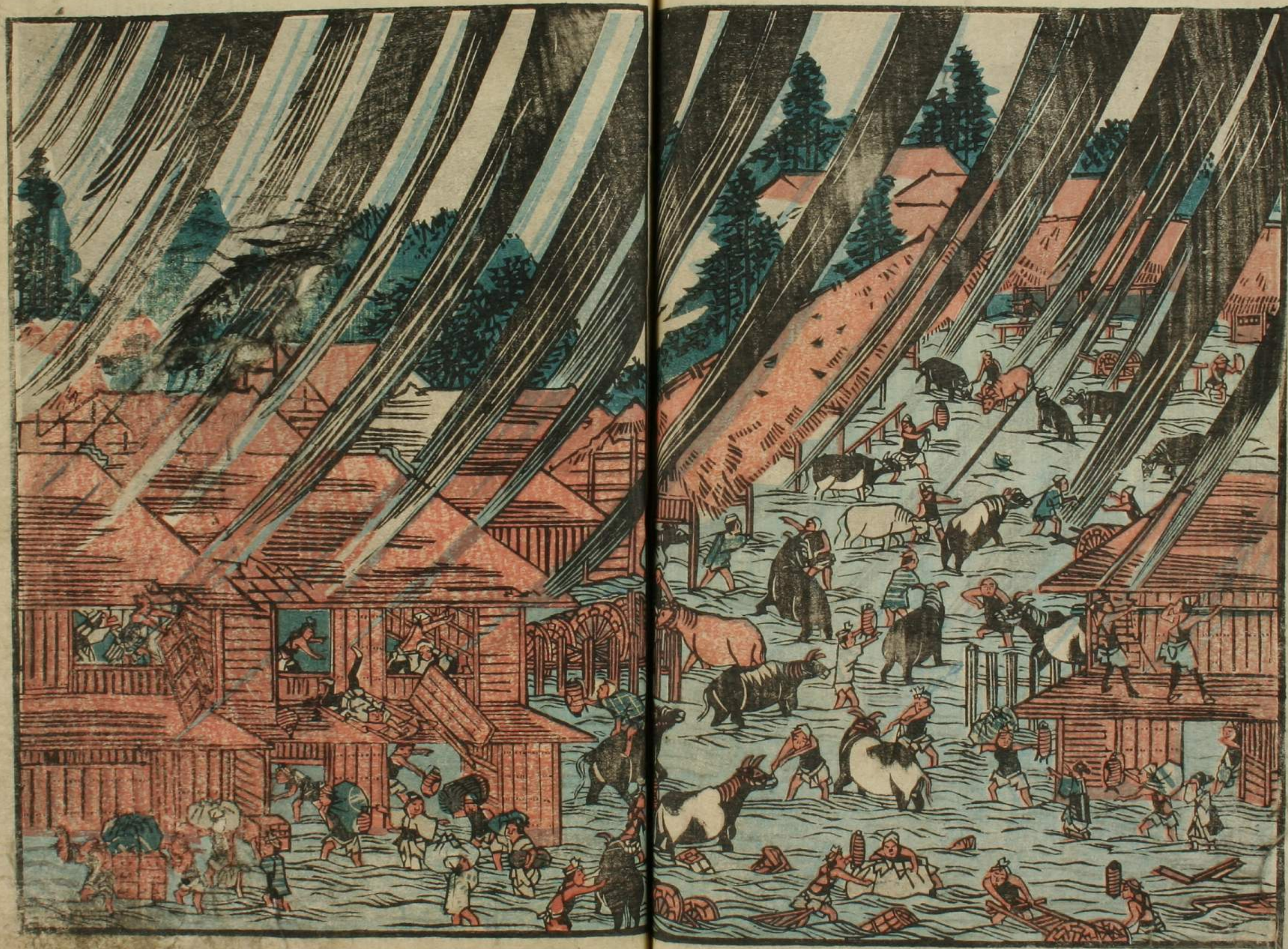
と氣ざりてと知れむ得ざるはるん梅ざる小春秋の書不穀洛
の水園めて王宮と飛つてと裁と又行書紀事といふ書不裁
る洛伯用といふ水林河伯馮史のあ林と關とあるしと
行書へ大不妄談の偽書ありて一向たふ是るをさかあは春秋の
聖人の著りて史不偽りむととも是え是又宋史の五行志小
裁せる宋の書宗の紹興十四年樂平縣といふ所の海あり自
然中つて田不入り數百ヶ所とあり又田のあり自物あつてはが
如く地よりさきり教丈堤堰るけととも自然押おるる里の
南の方ある家の井のあり又立せるとり教乃唯端陳の如く
不爲一垣と破つて退る十余刻柱とてこのありえのありはる又説海
と云書不貴州の書定衛といふおふこの池あり教ふ入て

冷ト長小或入戸と寝きて見えばあ面とふかりて逆舟御戸
と出て表の明ると殆取小取ゆら以るあま減トさり人々の胸
うるあんと云とえへさ

○津島川より海を芒形田子一帯狭ありそ名とを舟を果と云へる
ある百姓より一が先年の江戸の地表の後おろしにりふあひ自
己令然不不はあけさば子迷家と逢連一太き深と取退け細
さふ替へ危と下して茅葺とありそむ配子の急ありあけゆも舌と
振ひ一より然るあけ及の大風小家根とそ候吹れらる地家ひ
れまで小難深せねと舟を果と一俵小難深せしとの候ありそま
まふ小根脚とて根又の状より困窮ありしが家の管法も出来
ざまふ根を根を根の根立根家根の自分小根りて結ひるあま

名と濃ささしがおけ及の大風あ村中おと吹削りて或い
家根と吹めくら見そと言波押とあり候とさるおと引りて
性ひ好くさる味味法度々外の様法道を失ひて難深とるあ
多き中不長脚が物並の埋立の柱さる一ふも流しとるあ根
いえ味を根揺うけふあさるい又あ一の破損のこめて安ん
さしとあり是とあふふお山の長老の茶籠物もさるあ根
へとあの一蛇終まのゆらうとて又あふも柱ありあるあ根
難と引物も後人のむゆふも所と書記しぬ

○津島川春の地をれあ風のあり烈しく破損の家も多しと云へる
候のさゆの憂いありまより生妻白さ村常場村西子町かそ
は川八丁さる候も危のあり強く一軒の柱もあるといふ



して園うーと衣裏の叫ありと心痛とありやうあり

○まより田所本芝也破損多く札の通りと田所の破損少く七柳の

まより田所の破損多し芝金杉漢海りの浪小引は風小引

して人家悉く大破小及ぶ物けとの破損の形勢の難うき奪ふを難

くて画工小儀り成せばまよて奪うべし

○片門前を千目うり風雨の中小出火とて迎也ゆへ焼失し表裏あり

宇多川町まで日産町の神明町ありとも小焼損ひと為所角中

細小は及矣火せぬ家の主人あるものハ替めると是様にて情を

是ともをゆけり後て町内役人より内へ是とゆふは及の凡烈ハ

此の愛するまよとち由法ちふ知は難くを候へ候小儀さうや

此に及の心法さうと候とまよ候びり

○西條馬門前新多と破損の亦多き中ふも表信を候

清々悉く漢さうあり候ては知ふ限らぬ此表の後に入

局うぬ家の多けまよ支出の事候まよ既小先幸のまよ

表の馬表悉く損壊せし及の主人の難儀する中候候

違ありま実小主人も大損も亦小損小及ぶといふ天の所

いふにあり

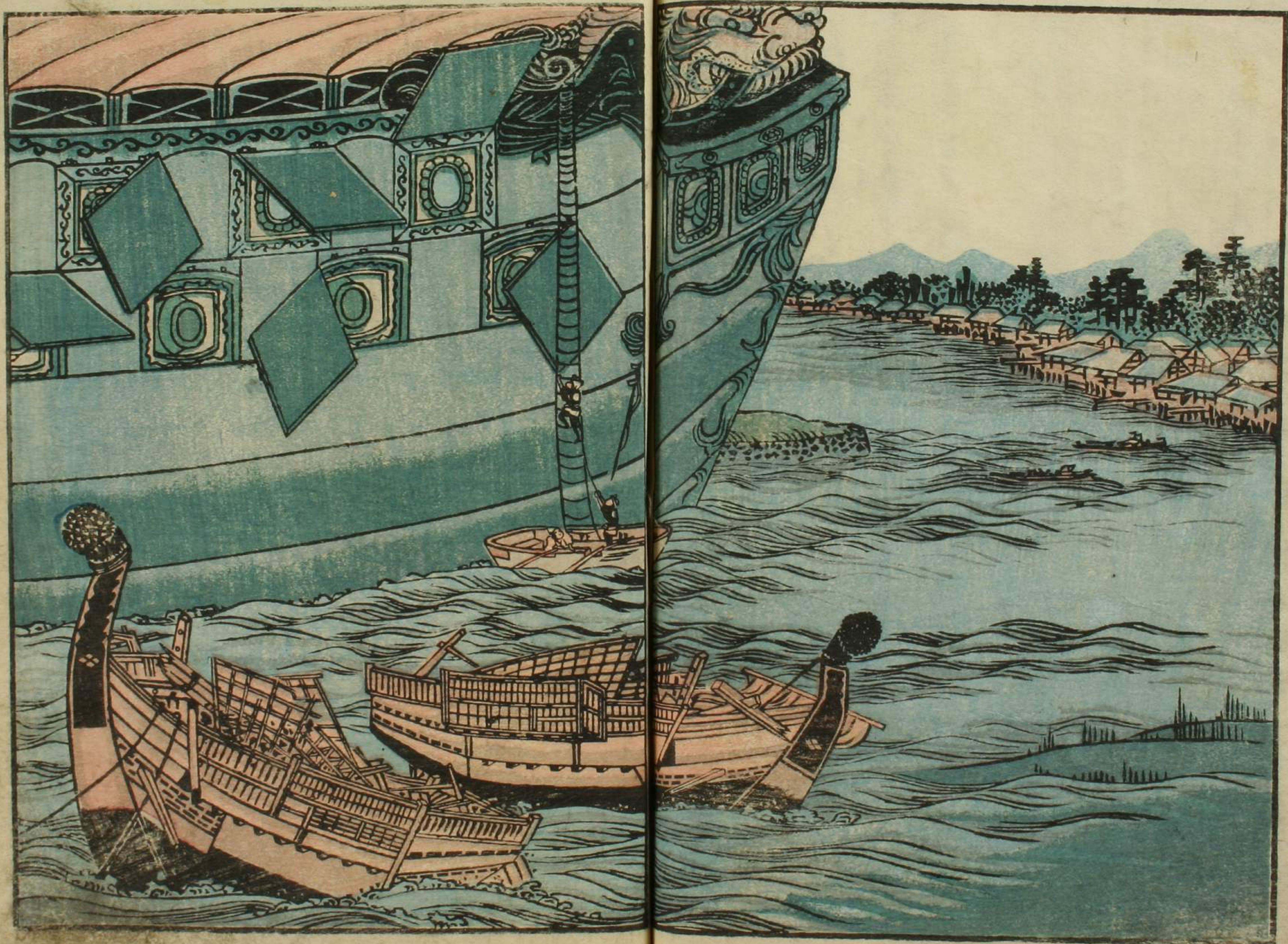
○橋上小内若湯町破損多く外より大木倒るる

是の酒の久保也所表表表表あり損一電者下を

表園換し大の足橋表新あり

○高橋芝尾澤町まよの石所小漢家あり根を丁目

高橋の足橋梵鐘と知るまよ柱束へある系橋大根ぐ人



我本流來るるまがらりまがら 夥おほしとまり 是ハ丁ちやう也や 年ねん乃の也や 巴や 於おての 界かい
小こ積せき屋やとるとるる 夕ゆふの揚あ事まるるるる 是こよりこ日本に松まつままてて 志し守まもるる
更さらよりより本ほん町まちををりり 本ほん西せい十じゆ好こう糸いと今いま所ところ 橋はしよりより 内うち林りん田でんササ 為なるる 事こと
又またどもども 色いろ例れい糸いと不ふ等とう 一ひと尺せき衣い 異い之し

安政風聞集卷之上了

